

優秀な受講生たちの優しさに支えられて

山根誠一郎
社会科学系助教授

はじめに結論を

「受講する学生たちが優秀であり、かつ彼らの優しさに支えられたからこそ、私はこれまで講義し続けることができたのだ。」これが、与えられた課題に対する本稿の結論である。

[Fine]

30年ほど前のこと。「講義する方は、あれも話したい。これも話しておきたい。と、いろいろ欲張るけれど、1回の講義で学生に理解してもらえるのは一つだけなんです。1回に一つ以上のことを喋っても混乱させるだけなんです。」とは、「今度、急病で倒れた世界史の教師の代役で、教員免許を持っていないのですが、臨時に私立高校の非常勤講師のアルバイトをすることになりました。」と、報告した大学院生の私へ、初めて「同業者」として恩師の与えてくれたアドバイスであった。しかし、中間・学期末と範囲を決めて試験を行う中で、他の教師のクラスに遅れずに授業ノルマを消化しな

ければならない高校のカリキュラムでは、これは至難の業であった。そもそも、18世紀英国財政史を専門とする駆け出しの学徒にとって、古代・中世の歴史は大学受験以来無縁の世界である。時給850円のアルバイト料は、当時の物価水準からすればなかなかのものであったが、参考書の購入に右から左へと消えて行った。事件の粗筋を追い掛けるのが精一杯の政治史。事項の列挙に終わる文化史。経済史だけは、なんとか一つのまとまりのあるストーリーとして説明することができたかと記憶する。同時に、教えることで、学ぶための資金が手に入ることの醍醐味に酔いもしたのだが。

以来、冒頭に「今日の講義の結論を言いますと、19世紀半ばのイギリスの国家財政は、産業資本の要求する自由主義経済政策に対応するものだ、ということです。キーワードは、『安価な』政府の実現、『中立的』租税の要求、公債の排撃と予算制度の成立。

要するに夜警国家ですね。これらのことが解っていれば、あるいは、自分で調べるのなら、今日の講義は聴かなくても良い訳です。」と、嫌味とも誤解されかねないことを言うてしまうことにもなった。また、黒板になぐり書きしながら話をするのも、「ノートの採り易い授業を」求められた1年半に亘った非常勤高校講師時代について、上品とは言えない癖である。

在り得べき講義の型とは？

学校教育の授業形態を、自動車教習所型、劇場型、実験工房型の3つに分類して論じたのは、1970年代初めの『思想の科学』だったろうか。「車を始動させ、途中事故を起こさずに目的地まで運転する」技術を体得させる必要のある教育の典型としての自動車教習所。舞台に見立てられる教壇で何ごとかを一所懸命に演じ、観客・聴衆を楽しませるピエロ。その楽しみが、アミューズメントに留まるか、インタレストの域に到達するかは、講義の質に依る。演技が下手なら、「ダイコン！」の罵声に甘んじる他無く、客の途中退場や居眠り、私語にも耐えなければならぬのが、講義担当者の宿命か。極め付けの野次は「入場料を返せ！」であるが、《単位認定権》という権力関係の下では、「これは大切なことなのだ。」と、学ぶことの楽しさをすり替えてしまう似非権威も

発動されかねない。化学者のリービヒが始めたという学生も教師も一緒になって試験管を振り回して新発見を追い求める実験工房は、文系なら演習がそれに相当するであろうか。思考実験の格闘技の場なのだから。論文指導では、これに自動車教習所の要素が混じってくる。

記憶に残る名講義

学部学生として受講した講義の多くは、教授の読み上げる文章を必死に書き留め、そのノートを見ながら説明を聞き流すか、指定された教科書の要領の悪い要約を聞かされるかであった。コピー機普及前夜の頃、学年末に生協プリント部の暴利にさえ目を瞑れば、低出席率で工面した時間を演習や自主ゼミの準備に振り替えることが十分可能であったし、少なからず充実感も得られた。

記憶に残る楽しい講義は二つある。定年前最終年度の日本経済史の教授。若い頃からの御自分の著作を順次紹介されながら、「なぜこんな論文を書いたのか。」「今思えば、ここは間違いです。なぜなら…。」碩学の総決算。一年間に亘る最終講義だった。昼休み直前20分遅れで始まり、30分は超過する日本経済論の講義テーマは、封建論争史。1センテンスが10～20分続くのんびりした口調の説明の中に、読んでいる限

りでは、どこにも論じられていない視点や話題が、さり気なく、必ず1つは登場した。半ば居眠りしながらも、その時だけは慌ててノートしたものである。とは、言っても、最早詳細は忘却の彼方。

「卒論テーマを教授に訊ねられて『江戸時代の農民の生活を考えています』と答えたら、一言、『豚に歴史はあるんですか』と。とんでもない時代でした。」「労農派と間違えられて逮捕された宇野先生が塩竈署の留置場で詠んだ句がありまして、『春浅き隣は何をした人ぞ』。これを聞いた桑原さんが、戦後書いたんですね。『第二芸術論』を。」といったエピソードだけが残っている。

アドリブ演技の講義に

博士課程も留学期間に入ると同時に、本学社会学類の非常勤講師として、財政学の講義を行うことになった。東京の西から片道3時間半。75分の講義のために往復7時間を費やす2年間だった。出なければならぬ大学院の授業は、週1日。残る5日間の大半は、講義ノートを作るための資料の収集・消化・整理に消えた。この時に気が付いたこと。第一に、用意したノートの半分から2/3は、講義で喋りきれず割愛せざるを得なかった。第二に、こちらの用意した説明の文脈が受講生には空回りして聞こえていることがしばしばあるらしいこと。講義

の前提である近代政治史の知識や経済原論、経済政策論などの議論が共有されないままでは、一切が徒労に終わることにもなりかねない。そして、第三に、ノートの棒読みに陥ることが少なく無かった。詳細に準備したつもりでも力及ばず、出来の悪いシナリオに嫌気がさして、その通りに話をすることに耐えられない自分が居た。

以後、専任になってからの講義準備メモは極く簡単なものになった。学生の顔を見ながら話すことを心掛け、必要と判断する限りで、近接分野の経済学や政治学、法学はもちろんのこと、聖書や小説、音楽、美術など、自分の知識と興味の及ぶ限りでの越境も敢えて試み始めた。したがって、脱線が多くなり、「話があちこちに飛躍して、何の話も聞いていたのか判らなくなる。」との不評も出るし、時には「さて、何が問題でしたっけ?」と、こちらから尋ねる始末ともなりかねない。無い知恵を絞り尽くしているだけなのだが、「博覧強記を装った知識の切り売り」との批判に出会ったこともある。日本財政史の特殊講義を聴講してくれた日本労働政策史専攻の韓国人大学院生と十数年ぶりに偶然再会した時の「先生が講義で配られた、幕末から高度経済成長期までの、それぞれの時代を描いた小説80冊のリストは、私の宝物です。」との言葉には、ただ感謝するのみだった。

アドリブ・スタイルの極地は、アメリカのロースクールで採用されていると言うソクラテック・メソッドだろう。これは、学生の反応が如何なるものか、教師経験の蓄積だけではなく、当意即妙の対応ができる頭の回転の早さが必要なので、私ごときの及ぶところでは無い、と早々に諦めた。元々、記憶力に自信がない。「この順序で事態が進んだことが大事なので、何年のことだったかは、各自確認しておくこと」と宿題にするのはともかく、極当たり前の漢字を急に思い出せず、恥ずかしい立ち往生もあった。近年は、人名を思い出せない事故が多発している。老いた、と言う他は無い。

手練手管を弄するも…

インターネットが普及したお蔭で、教室が空間的にも時間的にも、外に向かって拡がりを持つようになった。電子メールによるレポートや質問の受け付け、シラバスばかりでなく、講義の進行情況に応じて、レジュメや補足をWWWに掲載することも容易になった。しかし、機械を介在させたコミュニケーションは無機質である。学生の顔を見ながら、聴き手の反応を感じ取りながら講義の方が遥かに人間的である。講義終了直後、学生から質問の声をかけられることは、やはり嬉しい。

期末試験の「受験者心得」は、大凡以下

の通り。1) 参照資料の持ち込みは自由。2) 試験場の出入りは自由。但し、30分以上試験場を離れる必要がある場合には事前に届けること。3) 引用・参考文献を漏らさず明記すること。4) 答案用紙の試験場外への持ち出しは認めない。5) 試験終了時刻は未定。守衛さんに、管理上の問題で帰宅を促された場合には、試験場を研究室に移動する。6) 試験場内では静粛に!! かつて、この試験方式を「バトル・ロイヤル金網デスマッチ」と名付けた学生が居た由。暗記を強いる必要のない劇場型授業だからこそ可能なことではある。この試験方式の秘密は、落第答案が出てこないことにある。とは、言っても、私の講義の教育効率は極めて悪い。受講登録者と単位修得者との比率が、20～50%なのである。 [Da Capo]

(やまね せいいちろう/経済学)